EDO-TOKYO MUSEUM 江戸東京博物館

えど友 EDO-TOMO

No.51
2009
（平成21年）
9 ― 10

えど友ホームページ
http://www.edo-tomo.jp/

江戸東京博物館友の会会報

目次

『うるわしき大正新版画展』開催 …… 1
新役員紹介（私のプロフィール）…… 2～3
友の会セミナー『江戸の旅』…… 4
友の会セミナー『浮世絵の魅力』…… 5
特別観覧会『写楽　幻の肉筆画』展 …… 6
江戸博クリップ『専門は、昆虫と鉄道です』…… 6
見学会『知られざる浅草　探訪』…… 7
えど友サークルだより／会議・会合日誌 …… 8
えど友プラザ『両国の百本杭余感』…… 9
『牛込城と江戸の火事』…… 9
落語で江戸散歩…⑩［品川心中］…… 10
催事案内／会員優待のお知らせ …… 11～12

よみがえる浮世絵『うるわしき大正新版画展』9月19日より開催

江戸時代の伝統を引き継ぎ制作された 大正新版画

―企画担当の小山周子学芸員に聞く―

―「大正新版画」のことについて、まずお願いいたします。

小山―明治から大正にかけましては、西洋的なものがたくさん入ってきて、日本的なものはすたれていく一方でした。そんなときに立ちあがった人が渡邊庄三郎という浮世絵商です。彼は、当時まだ少しはいました職人を集めて、江戸時代と同じ木版制作のシステム―絵師（版画家）、彫師、摺（すり）師の役割分担―により、大正4(1915)年から新版画を制作するようになりました。この版画は江戸の文化を活かしながら、芸術性を求めるものでしたので、多くの版画家や画家がだんだん参画するようになり、1930年代になりますと欧米からも高い評価を受けるようになり、大量の作品が海外に普及していきました。その結果「新版画」は、日本国内よりむしろ外国で、日本美術の代表格として（江戸時代の）浮世絵と同等か、それ以上の評価を得、Shin-hangaという用語まで定着している状況です。

―そのころはまだそのような職人、あるいは技術を持った人がいたのですね。

小山―はい、少し前の明治時代ですが、日清戦争(1894～5年)ごろまでは報道のための版画が数多く残っていますが、その10年後の日露戦争になりますとまったくと言っていいくらい版画による報道はありません。なにがとって代わったかといえば新聞と写真です。結果的に、技術者の数は減ってしまい、大正の初めごろには、ほとんどいなくなったのではないでしょうか。だから、優れた江戸の文化を引き継ぎ、それを活かした芸術活動を実践したいと渡邊庄三郎という人を中心に木版画活動が展開したのだと思います。

▲小山周子学芸員

―江戸時代の浮世絵とこの時代の版画とはどう違うのでしょうか。

小山―一口で言えば、西洋的技法が入ってきた、つまり遠近法とか陰影法が取り入れられ、より写実的になりました。もともと江戸時代の浮世絵は刷り物の文化で、その中から、たまたま北斎や広重などの傑作が誕生したに過ぎません。これに対し、新版画はあくまで出発点から美術品を目指していた、ということです。

―ずばり、見どころは？

小山―新版画全部です（笑）。篤姫の女乗物でも知られる米国サックラー美術館のムラー・コレクションから30点初公開されます。展示点数は250点、新版画総点数のほんの一部ですが、いずれも名品ばかりです。このような展覧会は日本であまり行なわれていません。江戸の浮世絵と比較していただいてもおもしろいのではないでしょうか。

―どうもありがとうございました。

（会期は9月19日から11月8日まで）

【聞き手】広報部会・福島信一

新役員紹介

（私のプロフィール）

5月22日開催の第9回友の会定期総会で選出された新役員14名の自己紹介です。
よろしくご支援をお願いいたします。

＊イラストは会員で今回役員に再任された藤井文乃さんに描いていただきました。
＊鈴木寛さんからは原稿がいただけませんでした。
＊前号２ページの「新役員分担決まる」の中で津島英夫さんは津島靖弘さんの誤りでした。
　お詫びして訂正いたします。

会　長　松原（まつばら）　良（まこと）

01年の「大江戸落語展」の折、友の会設立準備中のビラを手にして、発足と同時に入会。当時から、落語、野球（パ・リーグ）、川柳、雑俳、水彩画など多趣味でその上「江戸博友の会」までと思いましたが、今では「友の会」がメインになってしまいました。9月にはテプコ浅草館で絵の個展をやる（1～6日）などの茶目っ気は残しつつも、「友の会」もしっかり楽しくやっていきたいと思います。どうかお力添えをお願いします。

会　計　岡東和子（おかとうかずこ）

私は歌が好きでコーラスグループに所属しています。また木彫り彫刻にも興味があり、現在も「立ち雛」を彫っています。「楽しくてためになる」友の会活動を継続できますよう微力ながらお手伝いさせていただきます。ひとりでも多くの方々に会の活動に参加していただき、一層充実した会にしていけたらと念じております。

副会長（事業部会長）　藤村武雄（ふじむらたけお）

副会長、事業部会長に再任されました藤村です。1,700名近くの会員の皆さんが楽しく勉強できる友の会を目指して、一層がんばりますのでよろしくお願いします。友の会は会長一人で運営するものではありません。その点、よく理解されている松原会長を支えて、運営委員の皆さんと十分話し合い、協力していきたいと思っております。

会　計　末永俊幸（すえながとしゆき）

生まれは広島ながら在京四十年以上の何よりも江戸大好きな元サラリーマン。事業部会と総務部会でお手伝い。皆さんと共に楽しく活動させていただきたいと思います。好きな言葉は「みんなちがってみんないい」です。今、生かされていることに感謝し気づかされることばかりの毎日です。

副会長（事務局長）　清水昌紘（しみずまさひろ）

留任が承認されて二期目に入りました。今期は事務局長のほかに副会長という大任を拝命し、えらいことになったというのが本音です。でも、友の会のためなら、と思いこれからの２年間一生懸命務めさせて頂きます。本来事業部会で催事のお世話係をしていますが、とても勉強になります。多くの愉快な仲間と一緒に楽しい事業部会にいて、とても良かったと思っています。事業部会でも頑張ります。これからもよろしくお願いします。

運営委員（事業部会）　小林弘明（こばやしひろあき）

好きなもの —— 江戸・東京・関八州・日本橋・富士山・浅草・東照宮・三越・どぜう・縄文人・大名・旗本・山手・下町・会津・ご府内八十八ヶ所霊場・助六・染井吉野・東博・里見八犬伝・江戸菊・文京ふるさと歴史館・JR東日本・藩史研究会・道灌。これはちょっと —— 関西弁・芋麦焼酎・はも・たこ焼・薩長。だから、江戸博・えど友が好き！

運営委員（事業部会）西村英夫（にしむらひでお）

えど友に入会し４年ですが、２年前に退職してから、本格的に部会活動、サークル等に参加して楽しく勉強？させていただいています。酒、タバコもダメな体になってしまいましたが、毎日を楽しく元気にをモットーに過ごしています。見学会等に参加するためにも、足腰を人並みに強くするよう、ゴルフ、散歩で鍛えています。少しでも友の会が楽しく参加できるように努力していきたいと思っていますので、よろしくおねがいします。

運営委員（総務部会）藤井文乃（ふじいあやの）

前期からの継続です。前年度に作った〈えど友専用綴じ込みファイル〉についてのご意見や感想をお待ちしています。私は時代小説が好きなのですが、捕物帖や人情話をよく読みます。また怪異譚なども大好きで、会員の方には時々「お化けの人」と呼ばれることも。どんな時代にも不思議に思われる出来事が沢山あってわくわくします。書き残してくれた人々に感謝。

運営委員（事業部会）野川陽一（のがわよういち）

特典目当てもあったが、会社の引退を機に友の会会員となって３年になる。各種行事に参加する内、私も何かお手伝いをと思っていた時に、事業部会からお誘いがあってメンバーになった。下手なガイドや説明をカバーしようと、下見と下調べには時間を割くことにしている。「今日は良かったです」などと言われると、にんまりと笑みがこぼれる。結局自分が一番楽しんでいるのかも？　今後ともよろしくお願いします。

運営委員（プロジェクト）津島靖弘（つしまやすひろ）

若いころは好きな落語や講談を聞き、時を経て池波正太郎・藤沢周平の小説を読み、昭和の庶民である私が江戸の庶民の暮し振りが知りたくなり、古文書に興味を持ち、あちらこちらの教室に顔を出し、現在江戸博友の会の古文書サークルで楽しく時を過ごしています。これからは古文書の面白さをさりげなく伝えていければいいかなと思っています。

運営委員（広報部会長）福島信一（ふくしましんいち）

どこで手に入れたのか、今となっては覚えていませんが、平成18年発足の「江戸文化歴史検定」のチラシがそもそもの始まりでした。それからは、すっかりどこぞの出版社の営業戦略に乗せられてしまい、その年の10月にあった「大江戸見聞ウォーク」では「北町南町奉行所コース」を歩き、12月には『江戸東京博物館・友の会』に入会、そして広報部会員になった新参者です。どうぞよろしくお願い致します。

監　事　早川良躬（はやかわよしみ）

江戸博との出会いは、平成４年に館設置の条例立案に取りかかるため訪れた時です。まだ開設準備の最中でしたが、江戸東京四百年の歴史文化を凝縮した巨大な殿堂を目のあたりにして感動を禁じ得ませんでした。開館後、館には色々な職場でご協力いただきましたが、今また友の会の皆様と学び合い、交流できる機会を与えられ、大変感謝しております。

運営委員（広報部会）深尾恵美子（ふかおえみこ）

『半七捕物帳』で江戸にはまり、地方の小江戸めぐりの旅で伊能忠敬や芭蕉の凄さに感動してお江戸の世界にのめり込んだ私です。最先端の流行を追い、時のスターに熱狂、職場の人間関係を愚痴り、メタボや虫歯を気にしつつも美味しい食と酒には目がない、数百年前にそんな自分はいたと確信しています。寛政の時代なら自分はどんな町娘だったか？　と夢想にふけるこの頃です。江戸の深い懐を愛する皆様と、江戸度を高める出会いを期待しています。

監　事　松岡勝彦（まつおかかつひこ）

友の会会員の皆さん今日は。監事に選任されました松岡です。子供の頃、毛利藩の城下町長府（下関市）で育ちました。当時、町の小さな博物館で、狩野芳崖の名作「悲母観音図」を見て、大変感動した記憶があります。幸い、東京都在職中にも、何度か文化に携わる機会を得ることが出来ました。文化の重要性は決して一過性ではなく、一生の糧になる何かを与えることだと実感しており、これからもベストを尽くしたいと思っております。

第82回　江戸東京博物館友の会セミナー（2009/6/27）

「江戸の旅―その驚くべき実態と観光旅行の諸相」

講師　菅野（かんの）俊輔さん（江戸歴史文化研究家、早稲田大学エクステンションセンター講師）

江戸時代も後期になると「観光旅行ブーム」といえる状況が現出します。男性と同等に、女性たちも長期旅行を楽しむようになるし、全国的に伊勢講など庶民が旅をするようになります。今回は、庶民たちの驚くべき旅の実態と観光旅行（物見遊山）の実相をいろいろな資料（当日の配布資料）とともにご紹介したいと思います。

江戸の資料をひもとくと…

旅行をする以前、庶民が「旅」に出あうのは、旅行者の話のほか、正月遊びの道中双六、寺子屋の教科書『都路往来（東海道往来）』、長大でビジュアルな彩色の『大日本行程大絵図』などにおいてでしょう。女性を対象とする寺子屋の教科書が膨大に残っていることを思えば識字率の高さがうかがえますが、旅をした庶民のなかに道中日記をしたためる者がいて、江戸後期の年号を記す原本が豊富に残存しています。著名なものを２つ紹介しましょう。

一つは斉藤元司（のち清河八郎）の『西遊草』(岩波文庫)。26歳の安政２(1855)年、母親孝行のため従者を連れて故郷の出羽清川村（山形県）を出発し、西は周防岩国（山口県）・安芸宮島（広島県）まで半年かけた大旅行をします。いま一つは田辺聖子さん紹介の、小田宅子『東路日記』(集英社文庫)。北九州の女性４人組と男性従者３人の５ヶ月に及ぶ旅行が記されています。どちらも金毘羅様やお伊勢様など諸国の寺社詣でをしつつ、しっかりと「三都」の大坂、京都、江戸などを見物します。

携帯用のガイドブック、道中記（出版物）も江戸の旅が体感できる便利本です。東海道や中山道など五街道に加え、脇往還の細かい情報なども網羅された道中細見記もあります。各地で出版が確認できますので、諸国の人々が旅を楽しんでいたことがわかります。

人々は寺社参拝を名目に旅行をしたわけですが、資料からうかがえることは、江戸後期の庶民たちの旅の第一の目的が伊勢参りと金毘羅詣でであると同時に物見遊山だったことです。

大旅行ブームの火付け役

旅行ブームの火付け役となったのは、三都で出版された『東海道名所図会』(寛政９(1797)年）と江戸で刊行された十返舎一九の滑稽本『東海道中膝栗毛』(享和２(1802)年刊行開始のロングシリーズ）です。この２点以降の出版物を追ってゆくと、旅ブームの到来が確認できます。

一九自身も『膝栗毛』続編の刊行中に、出版社からの依頼を受けて廉価な絵草紙本『金草鞋』シリーズで旅ものを手がけます。今度は奥州岩沼の町人体の者とお坊さんの２人(狂歌修業)が、弥次さん喜多さん同様に長途の旅をする話ですが、毎丁に挿絵がある点で読者層の広がりが推測できます。

『膝栗毛』刊行からまもない文化元(1804)年には大坂で「浪花講」が誕生します。提携の定宿となった三都、諸国の旅籠は看板を掲げて安心な宿を提供するようになります。東国でも「東講」「関東講」「江戸講」などが結成され、三都の業者、伊勢の御師（おし）が提携した旅行代理店のような存在に発展してゆきます。

文化７(1810)年には『旅行用心集』という旅の心得をまとめた便利な決定本が登場します。街道の景勝地とその里数、寒い地方へ行く際の注意点、船や駕籠（かご）で酔った時の対処法、持ち物リスト、温泉ガイド…等々盛りだくさんです。

旅行代理店のほか宅配業者も存在？

では、道中日記によってみなさんを江戸の旅にご案内しましょう。安政６(1859)年11月15日、陸奥三春（福島県）に近い村から男７人が伊勢詣での旅に出立します。奥州道中を関宿から船で江戸に入り、馬喰町の宿に２泊、案内人を雇い江戸見物をします。その後、東海道を上りますが、鎌倉、江ノ島、大山に寄ります。東海道沿いの箱根権現、三島大明神、遠州の秋葉権現、三河の豊川稲荷など、江戸の庶民の信仰心は広いといいましょうか…。

12月９日到着の伊勢では「御師」の屋敷に泊り、豪華料理の歓待を受け、目的の祈祷（きとう）や神楽を願い、両宮・末社を参拝して朝熊山・二見ヶ浦を見てまわります。御師のはからいで駕籠が用意されており、行く先々で弁当がでるといったいたれりつくせりの観光です。

伊勢のあとは各地をまわり最後は京都に泊る予定ですが、何と御師に頼むと村へのお土産品などの荷物を京都の宿に届けてくれます。御師は旅行業者、宅配業者を兼ねていたようです。

手軽になった一行は、元旦に金毘羅参詣のため道を急ぎますが、驚きの行程です。伊勢から南に向かい、まずは熊野三山へ、次いで北の高野山、吉野山、大和路を北上して奈良の春日社や東大寺、法隆寺などたくさんの寄り道・参拝をして生駒路から堺・大坂へゆきます。そして大坂から船で丸亀に渡り、大晦日に金毘羅に到着です。

長い旅の帰路は、瀬戸内海を渡って姫路城の天守を望見し、京都見物のあと木曽路（中山道）を善光寺に向かい、日光山に立ち寄って、ようやく正月晦日の夕暮れ、わが村に帰り着きます。

江戸後期、庶民は大いに旅行を楽しんでいたわけです。なお、各種の名所図会の挿絵を見て気づくことがあります。女性の姿が多いことです。携帯が義務とされる「往来手形」に「此女四人」とだけ書かれたものがあることを思えば江戸の長屋のおかみさんも「ちょっと行ってくるわね」と気軽に旅に出たのではないかと思われてきます。

【記録】文・写真：広報部会・中里弘子

第83回 江戸東京博物館友の会セミナー（2009／7／25）

「浮世絵の魅力」

講師　小澤　弘さん

（江戸東京博物館都市歴史研究室長・教授）

浮世絵の見方について

現在、浮世絵で最も注目を集めている作品は、ギリシャ・コルフ島で発見された東洲斎写楽の肉筆扇面画「四代目松本幸四郎の加古川本蔵と松本米三郎の小浪」の「仮名手本忠臣蔵」にちなんだ作品でしょうか。写楽の版画はいくつも海外流出し、かつて発見された肉筆画については本物かどうかの疑念がありましたが、今度の発見は本物と間違いないのではと思います。

浮世絵は庶民芸術と言われていますが、それは江戸後期のことで、春信や歌麿あたりまでは、町人でも教養ある人々の享受するものだったようです。それは「見立て」や「やつし」といった表現法を理解し、当時の世相や、歴史や古典の教養がないと、よく鑑賞出来ないという奥深いものだったのです。

肉筆画と版画

製作技法から浮世絵は肉筆画と版画に分類されます。肉筆の浮世絵とは、浮世絵師が画絹や料紙の上に筆で墨や岩絵の具で描いた作品で、それぞれオリジナルであり、素材や仕立てにさまざまな形式があります。

浮世絵版画は、（1）単色摺り、（2）単色摺りに筆彩（墨摺り絵に彩色を施したもの）、（3）多色摺りとがあります。多色摺りの技術は、すでに中国では古くから始まっていました。また日本でも仏教版画などに江戸期以前に作例はありました。

しかし、江戸で発展した「錦絵」は、強靭（きょうじん）な和紙と山桜の柾目板（まさめいた）を用いた多色摺り版画であり、彫り摺りによるデリケートな表現や暈（ぼか）しなどの独特な版画様式を確立しました。そして、美人・役者・名所・花鳥・武者・時事などの豊かなジャンルを表現し、当世風俗の表現や見立てに、日本独自の文化様式の発展があったのです。

狂歌サロンと大小摺物

錦絵の誕生は、大小摺物という一枚摺りの絵暦の競作から始まりました。とくに旗本の大久保巨川（きょせん）や阿部莎雞（しゃけい）、それに飯田町の薬種屋小松百亀（ひゃっき）などの狂歌サロン（連や組）が、その推進的な役割を果たしました。この時登場した浮世絵師が鈴木春信でした。彼は古典的な主題を当世風に見立てた画や、笠森お仙などの評判美人画を描いて世にもてはやされました。

春信が巨川のアイディアで描いた見立て絵「座敷八景」があります。その初摺りの作品には、絵師「春信」の名はなく、画中に「巨川工」とあり、巨川の考案であることが示されています。

このように構図や意匠を借用しながらも、春信の画が新鮮な作品として映るのは、見立ての妙味と多色摺りの美しさがあったからです。また背後には、春信を操って遊んだ江戸の文化人たちの存在を忘れてはならないでしょう。

板元を中心とした錦絵制作

錦絵の制作は、板元とそのブレーンの文化人が画題のアイディアを出し、板元プロデュースの下、絵師・彫師・摺（すり）師の共同作業により完成しました。

画題が決まると板元は抱えの浮世絵師に板下絵を描かせました。松平定信による寛政の改革以降、一枚摺り絵も風俗取締まりの対象となったため、地本問屋組合の年行事に板下絵を見せて改印（あらためいん）（検印）を貰わないと刊行が許されませんでした。改印を受けてようやく制作がスタートするのです。最初、主板（おもはん）（墨摺り板）から校合（きょうごう）摺りを摺り、これに絵師が色差しをして色板が彫られ、試し摺りののち、最終的に色彩、摺りの調子、暈しの具合などを決めて摺り立てました。色ズレを防ぐために「見当」が考案され、また十数度もの摺りに耐える越前奉書紙の流通により、多色摺り木版画の量産が可能となったのです。

創作版画と新版画

明治維新になって明治の錦絵は、光線画の小林清親などによって新たな展開を見せましたが、やがて明治末期～大正期を迎え、自彫自摺の山本鼎、恩地孝四郎らの活動は創作版画と呼ばれました。その一方で、版画店主渡邊庄三郎は浮世絵版画の技法を受け継ぎながら、画家の橋口五葉・伊東深水・吉田博らによる新しい感覚の版画を制作し、新版画と呼ばれました。

浮世絵が、欧米など海外での発見があいつぐのは、江戸期に長崎を通してオランダ商館長やシーボルト等の外国人が、日本の風俗をよく写した、しかもこんなに安価な土産物はないと、大量に買い求めたという背景があります。これらをふまえて浮世絵探究のさらなる飛躍が期待されます。

浮世絵ってすごいと思いますよ。「浮世絵の魅力」が少しでも多くの方に分かっていただければありがたいです。

【記録】文：広報部会・松田悠美子
写真：同・佐藤幸彦

江戸東京博物館友の会特別観覧会
(2009/7/10)

「写楽 幻の肉筆画
ギリシャに眠る日本美術～マノスコレクションより」

7月4日から9月6日まで開催の「写楽　幻の肉筆画」特別観覧会が、7月10日(金)午後5時から開催されました。最初約30分間、担当学芸員我妻直美さんの解説があり、その後展示見学に入りました。この展覧会の副題は「日本・ギリシャ修好110周年記念特別展」というものですが、何を起点に数えたものか説明はありません。あるいは日本がハーグ国際平和会議に参加して以来110年と解すれば良いのかと思います。もう一つの副題は「ギリシャに眠る日本美術～マノスコレクションより」です。

これらの主題・副題と見学結果を突き合わせて見て、今回の展示内容を適切に表現するならば「ギリシャ・コルフ島美術館マノスコレクションの日本美術」ということになろうと思います。

ギリシャの駐オーストリア大使として活躍したグレゴリオス・マノス(1850－1928)は生涯アジアの美術品の収集に努め、全財産を投じて約9,500点の品をオークション等で入手して、晩年にギリシャ政府に寄贈しました。それがコルフ・アジア美術館の収蔵品の核となっているのです。彼の時代にはいわゆるジャポニズムがヨーロッパに広がり、彼の関心は日本の芸術への傾倒となったようです。

今回は狩野山楽以下の狩野派の絵画、そして多くの浮世絵版画が初期、中期、後期に分類して展示され、その他、摺物(すり)・絵本等、有名絵師を網羅して合計126点、いずれも保存が良好というよりは、今まであまり人目にさらされていない、素晴らしい色彩で、浮世絵の歴史を理解するのにも良い機会となりました。

写楽の肉筆画は新発見の扇面のみです。この扇面については鑑定団を組織して詳細に論議した結果、詞書きは後日書き加えられたものだが役者絵の方は正真、と断定されたのだそうです。しかしこの扇面の正真性を否定する人も居た、と聞きました。そう思って見るとこの扇面は写楽の作としては傑作でないことが見て取れます。たとえば衣服の描線はよたよたして滑らかではないこと、女形の髪の生え際が丁寧に描き込まれていないこと、紫の帽子を描いたのかどうか判然としないこと、女は加古川本蔵の妻戸無瀬にしては若造りで娘小浪にしては老けていること、女の両目の力が抜けていること等々が問題となりそうです。この絵が河原崎座の舞台から取材されたものとすると、写楽の最後の作は、今まで寛政7(1795)年1月とされていたのですが、その4ケ月後のこの扇面ということになります。写楽が彗星の如く現れて急に消え去ったのは神経の麻痺のせい、というのは考え過ぎでしょうか。

今回の展示のポスターを見て、写楽の肉筆画がずらりと並ぶと思って入場した方も多いでしょう。実はこの扇面だけなのです。しかし写楽の絶筆発見ということは、浮世絵史には大きな一石なのです。

【取材】文・写真：広報部会・佐藤幸彦

江戸博クリップ

「専門は、昆虫と鉄道です」

学芸員　関(せき)　次(じ)　和　子

友の会会員のみなさま、初めまして。この4月から事業企画課・展示企画係のスタッフになりました関次です。特別展ごとに開催される「友の会特別観覧会」では皆さまにお目にかかる機会もあると思いますので、よろしくお願いします。

江戸博では来年、特別展の関連事業で自然観察会を予定しており、先日その下見と調査のため、たてもの園の昆虫教室に参加してまいりました。「昆虫採集」というと男の子の趣味と思われがちですが、意外なことに参加者の半数は女の子。往年の昆虫少女（30年以上昔ですが）を自称する私としては、たいへん頼もしく感じました。

虫にとりつかれた子どものことを「昆虫少年」「昆虫少女」と言いますが、おそらくこの言葉は日本だけではないでしょうか。セミの声を聞いて暑さを感じ、鳴く虫の歌声を聞いて秋のおとずれを悟る。日本の子どもたちは好奇心や科学心だけでなく、美意識をもって昆虫を見ているのですね。昆虫少年・少女たちは往々にして、成長するにつれほかの遊びへと興味を移してゆくものですが、自然への関心はぜひ持ち続けてほしいな、と密かに感じた次第です。

私はもともと映像文化史、自然写真史が専門で、昆虫や動物、山岳、鉄道などに関する写真の展覧会や作品集などを担当させていただきました。「なんで江戸博に専門が自然史や写真史？」とお思いの方もいらっしゃるかとおもいますが、お客さまの年齢層、関心、要望も多種多様な博物館で、今までの経験や興味が活かせればと思っております。会員の皆さまのご指導、これからもよろしくお願いします。

◆このコラムは江戸博の学芸員や講師など館職員の方に執筆をお願いしています。

江戸東京博物館友の会　見学会（2009/7/3, 4, 7）

知られざる浅草　探訪

梅雨明けが微妙な７月上旬、お江戸文化の中心地、浅草で見学会が行われました。えど友会員なら基本の浅草ですが、意外に知らない場所の探訪がテーマとあって、総勢200名以上の参加になり、７月３日・４日・７日にわたり、各回小グループに分かれての実施になりました。

一区から二区

雷門近く、浅草観光協会前から出発。仲見世は通らず、松下幸之助氏の寄進で知られる雷門の右側、裏手の道を真っ直ぐ本堂に向かいます。仲見世ほどではありませんが、祭用品や着物屋などがある通りをわき目もふらず通り抜け、弁天山にたどり着きます。石段の上にある鐘楼は元禄時代黄金200枚を鋳込まれたもの。御存じ芭蕉の句「花の雲　鐘は上野か　浅草か」はこの鐘のことです。注意してみると、周りには多くの塚や碑があります。都都逸塚碑、扇塚など踊りや唄でも中心地であった名残があります。その先の二尊仏の隣の久米平内堂は、江戸時代の剣の達人による建立だそうです。

最近修復の終わった宝蔵門、元力士でホテルニューオータニの創業者、大谷米太郎による寄進だそうです。山形県村山市奉賛会の奉納による名物の大わらじをながめつつ、古地図で五重塔の昔の場所と今の場所を確認します。

さらにその先には、迷子お知らせ石標があります。「たずぬる方」、「しらす方」それぞれの願いの張り紙ができるようになっています。当時の相当な混雑と喧騒が目の当たりに浮かぶようです。

現在修復中の本堂でお参りをし、浅草神社にぬけます。三社祭で知られる神輿が格納されている倉庫の前を通り、神社右手からその背後に歩くと、史跡や碑文がここにも数多くあったのでした。

幕末明治の歌舞伎本の作者、河竹黙阿弥顕彰の碑、花柳流の祖である花柳寿輔句碑など、昔は花街・芝居街が近くにあったという背景に納得。今も出世祈願の人が多く訪れる被官稲荷、山東京伝が生涯愛用した机が埋められているという机塚などもあります。ちなみに、この裏手は浅草寺のお坊さんの家だそうです。

四区と五区

さらに大型バスがよく駐車している裏手に行くと、気付かなかったのですが、市川団十郎が歌舞伎十八番の決め姿をしている暫（しばらく）像がありました。

ここから西方がいわゆる奥山です。ここには江戸時代東照宮がありました。目立たない小さな石造橋は、その頃の東照宮の神橋だったとか。浅草神社脇の二天門も本来は東照宮の門であったそうで、隠れ潜んでいる東照宮の名残に興味がそそられます。その頃は、大名旗本が正装でこの橋を渡っていたそうです。

この辺りは今も様々な行事が行われており、例えば淡島堂の２月の針供養は知られているところです。

その先の記念碑が数多くある新奥山で一息いれます。半七捕物帳の作者、岡本綺堂の記念碑があるかと思えば、明治・大正の活動写真全盛時代の弁士104名の映画弁士塚があり、流行発信地だった浅草が浮き彫りになります。

六区

さらに歩を進め、明治以後から現代に至るエンターテインメントゾーン、六区に向かいます。ここは浅草の別の側面を楽しめるところです。今は遊園地として賑わう花屋敷、古着やカツラなどのお店が並ぶ通りを抜け、江戸下町伝統工芸館に向かいます。ここでは、伝統工芸作品をゆったり眺めます。凧（たこ）、押絵などの展示もありました。実演がある時もあり、冷房もきいており、江戸の工芸品を知るのにお薦めの場所です。

さらに足をのばして、国際通りを渡り、合羽橋方面へ。ここで意外におもしろかったのが、東京電力のテプコ浅草館です。浅草文庫、懐かしい昭和の浅草を体験できる空間やジオラマもあり、浅草の歴史を実体験として感じられます。

ここから浅草中心地に戻ります。映画館、演芸館、寄席が立ち並ぶ浅草映画街を通り、下町の息吹を体感します。途中、お狸さまで知られる鎮護堂から伝法院の名庭園を垣根越しにのぞきます。小堀遠州作といわれる庭園は五重塔を背景に優雅にたたずんでいます。

最後は、伝法院通りからスターの広場、浅草公会堂前まで向かい、解散となりました。約３時間におよぶ歩行に気分は高揚しており、疲れをとる茶屋はたくさんあるのですから大満足です。こうした「知られざる」シリーズは今後も続けて欲しいと思いつつ散会となりました。

【記録】文：広報部会・深尾恵美子
写真：同・松田悠美子

サークルだより

◎活動概況

◆**江戸東京を巡る会**：6月16日(火)品川宿の2回目として大森貝塚から品川歴史館などを経て海晏寺までを歩いた。参加者21名。7月21日(火)五反田から池田山公園、ねむの木公園などを経て目黒の高福院、誕生八幡までを歩いた。参加者25名。

◆**落語と講談を楽しむ会**：6月16日(火)深川富岡八幡宮に集合、伊東敏男さんの案内で佃、月島まで落語ゆかりの地をめぐった。参加者12名。7月28日(火)武田夏男さん提供の落語「金明竹」のＤＶＤを鑑賞した。この噺は関西弁の聞き違いで笑わせるものだが、前々回の山形弁バージョンに加え、今回は名古屋弁バージョンと通常バージョンを聞き、みんなで話合った。参加者は16名。

◆**藩史研究会**：6月12日(金)前々回の天童藩織田家に続き野川陽一さんが丹波国柏原(かいばら)藩織田家、大和国芝村藩織田家、同国柳本藩織田家の明治期までについての研究発表を行った。参加者29名。7月10日(金)有田欽哉さんが備後福山藩の歴史について研究発表を行った。参加者は26名。

◆**古文書で『八丈実記』を読む会**：6月11日(木)、6月26日(金)、7月9日(木)、7月24日(金)に例会を開催。参加者は各8、10、11、10名。

◆**江戸御府内八十八ヵ所をめぐる会**：第25回として6月25日(木)と6月28日(日)に「第16番亀頂山三宝寺」(練馬区石神井台)など2ヵ所をめぐった。参加者は各30名、11名。また、第26回として7月23日(木)と7月26日(日)に「第12番明王山宝仙寺」(中野区中央）のあと札留の「第88番遍照山文殊院」(杉並区和泉)をめぐり、これで88ヵ所を全部めぐったことになり、満願となった。参加者は各24名、16名。次回にお礼参り（1番札所）と打ち上げ懇親会を行い、このサークルは解散する予定。

◎**新サークル、メンバー募集**

◆**神田川を歩き楽しむ会**

江戸東京の重要な河川である神田川を、その源流から隅田川へ注ぐ柳橋までを、善福寺川、妙正寺川、日本橋川、亀島川という支流を含めて全部踏破しようというサークルです。川筋に沿って歩きながら、付近の寺社や史跡なども訪れ楽しみたいと考えています。「江戸御府内八十八ヵ所をめぐる会」の後継企画ですが、新たにメンバーを募集します。毎月最終木曜・日曜の2回開催予定ですので、平日参加が無理な方も参加できます。参加ご希望の方は9月末までに事務局あてに氏名、会員番号を明記してはがきでお申込みください。お申込みいただいた方には10月予定の説明会などの詳細を連絡します（世話人・松原良)。

❖　❖　❖

●「江戸御府内八十八ヵ所をめぐる会」を除く**各サークルとも引き続きメンバーを募集**しています。奮ってご参加ください。参加ご希望の方は、はがきに①サークル名、②会員番号、③氏名をご記入の上、友の会事務局へお申込みください。また**新しいサークルの立ち上げ**希望の方は友の会事務局へお問い合わせください。

申込・問合せ先　〒130-0015 東京都墨田区横網1-4-1
江戸東京博物館友の会事務局　Tel.03-3626-9910

会議・会合日誌

2009／6～2009／7

◆**役員会**

6月10日(水)17時開催。本年度定期総会の総括を行い、新体制・役員名簿の確認と今後の運営方法を決定した。出席者15名。

7月9日(木)17時開催。前年度からの引き継ぎ事項の検討チームによる報告を踏まえて、その扱いを決定した。出席者14名。

◆**事業部会**

6月4日(木)17時開催。5月の事業報告と今後の事業計画を決めた。人気の古文書講座の運営方法や「えど友発表会」(会員発表会）の新企画なども決定した。出席者21名。

7月2日(木)17時開催。6月の事業報告と今後の事業計画を確認した。参加者の多い企画への対応方法を議論した。出席者23名。

◆**広報部会**

6月19日(金)14時開催。『えど友』50号の校正と次号の方針について話し合った。出席者7名。

7月17日(金)14時開催。『えど友』51号の担当とスケジュールについて話し合った。部会員補充のための募集を行うことになった。出席者8名。

◆**総務部会**

6月26日(金)13時開催。『えど友』50号の発送業務を行った。次号の日程や特別観覧会での協力者の確認を行った。出席者21名。

7月29日(水)13時開催。10周年記念事業のアイディアなどを話合った。出席者15名。

◆**文政町方書上翻刻 プロジェクト**

6月4日(木)、18日(木)、7月2日(木)、16日(木)A、Bグループとも例会開催。出席者は(A)各9名、9名、7名、8名、(B）各10名、10名、9名、9名。

7月24日(金)江戸博との打合せを行った。

7月30日(木)国会図書館での調査を行った。

えど友プラザ
友の会
会員の投稿欄

両国の百本杭余感

手島義之

両国の百本杭について興味の赴くまま書き綴り、この欄に載せていただいたが（『えど友』No.46、47）、心残りがあるので記す。

はじめに、広重の「名所江戸百景」（江戸百）の中の「両国橋大川端」である。この画は、両国橋の西詰広小路側から橋を描き、東側に渡った橋の少し左手上流に杭が多数描かれてあり、その少し上流にお竹蔵へ入り込む掘割に架かる御蔵橋が描かれている。この杭が百本杭だろう。広重の江戸百は単なる名所絵ではなく、ニュース性やメッセージ性を帯びた連作であるという（『謎解き広重江戸百』原信田実　集英社新書　2007）。

では、「両国橋大川端」にはどのようなメッセージが込められているのだろうか。『謎解き広重江戸百』では、「浅草金龍山」や「玉川堤」など例を挙げて謎解きをおこなっているが、「両国橋大川端」は取り上げられていない。川には茶船、屋根船、猪牙（ちょき）船などが浮かび、橋上は多くの人が行き来し、手前の広小路には店が並び人が往来し、葦簀（よしず）張りの店には人待顔の店員が描かれている。何の変哲もないのどかな風景に見える。単なる隅田川と両国橋の賑わいを描いたものなのだろうか。百本杭は背景にあり橋が主人公である。この頃（安政３・1856年）の両国百本杭はどんな存在だったのだろうか。

ここに『彩色絵はがき・古地図から眺める東京今昔散歩』という文庫本がある（原島広至　中経出版社　2008）。その中に「明治時代初期の両国百本杭」という手彩色古写真が載っている。撮影位置がどこか分からないが、岸辺近く枯れ朽ちかけた杭が多数残されている生々しい姿の写真である。これが百本杭を写した写真だとすれば珍しい写真だ。

彩色絵はがきについて簡単に記すと・・・、明治33(1900)年に私製はがきが許可されるようになり、各地の名所を載せた手彩色絵はがき（モノクロの写真に職人が手で彩色した絵はがき）が人気を博し人々に親しまれた、写真の台頭によって仕事が減った浮世絵職人たちが彩色に携わった（前掲書）・・・という。

おわりに、銭形平次である。銭形平次といえば、野村胡堂が創出した江戸時代の御用聞きで今日に至るまで生き続けている。その平次の捕物帳控えの一話「七人の花嫁」に両国の百本杭が出てくる（珠玉百選　『銭形平次捕物控１』　野村胡堂　新潮社　昭和34・1959）。

・・・６人の花嫁が誘拐される。犯人は挙がらず、あせった平次は許婚のお静と祝言を挙げることにする。犯人に花嫁をかどわかすチャンスを与えるのである。そして、お静は祝言の席から姿を消してしまう。探査が始まり、子分が変なうわさを聞き込んでくる。両国の水よけに緋縮緬（ひぢりめん）の片袖や、鬱金（うこん）色のしごき、鹿の子絞りの下締めだの変なものが百本杭や永代へ流れ着くという。これが事件解決の端緒となる。

平次が活躍していたのは寛永期から明暦期（1624～1657年）の頃（珠玉百選『銭形平次捕物控１』お珊文身調べ）と記してあり、寛永から明暦にかけて両国の百本杭があったこととして話ができている。また、「笑い茸」（『銭形平次捕物控４』角川文庫）では、・・・涼み船で隅田川を漕ぎ上がって、白髭の少し上川幅の広いところを選って中流に碇をおろした小型の屋形船の中で宴会がはじまる。宴たけなわのころ、船頭の三吉が船底の栓を抜き、大さわぎをしている間に向島の土手のあたりで船が沈んでしまう。翌日の朝になって、船頭三吉と野幇間（のだいこ）七平の死骸が百本杭から引き揚げられた・・・。百本杭は、川の水勢を殺（そ）ぎ流れを穏やかにする役目を果たすから、漂着物が流れつき魚の棲息所ともなる。

野村胡堂は百本杭になにか惹かれるものを感じていたのかもしれない。

牛込城と江戸の火事

島尻茂樹

中世、江戸町、神楽坂の高台に城があった（新宿区袋町15）。太田道灌の江戸城（長禄元年・1457年築）の背後だ。城ができたのは道灌の死後まもない（天文元年・1532年～弘治元年・1555年頃）。赤城山（群馬県）の麓の大胡重行の子、勝行が移り住み牛込氏を名のり築城。戦国時代には小田原の北条に仕えて、江戸城も凌ぐ支城であった。江戸幕府の開府で城は壊されたが、牛込氏は徳川の旗本となり地に残る。火事で江戸城に火がついたことを発見し注進参上するが、その事が仇となり、城を見下ろす地と恐れられて引越しさせられた。

城跡には神田から光照寺が移転（正保２・1645年）。振袖の大火の後は屋敷地が増えた。歌舞伎で有名な幡随院長兵衛が水野十郎左衛門に殺害された地とも伝えられる。享保の大火後は、天文台も建てられ、幕末に移転するまであった。現在、付近には光照寺や日本出版クラブ会館がある。

天文台については、出版クラブの大銀杏の前に『新宿区袋町六番地周辺　この土地の歴史の変遷「新暦調御用所（天文屋敷跡）」』という看板があって、元『文藝春秋』の平木基治という方が詳しく書かれている。うまくいくと、出版クラブで、「江戸時代の測量台」の絵図などを含む『天文屋敷とは？』という資料がもらえ、これには火事や火除地のことも出ている。

落語で

江戸散歩…⑩

[品川心中]

一昔前の品川浦

品川宿で一番といわれた名妓楼白木屋で、板頭（吉原でいう御職にあたる筆頭女郎）を張ってきたお染さん、ユウウツな日々がこのところ続いています。それというのも「紋日」が間近になり、見世のもんに移り替え（季節の更衣）のご祝儀をしなければならないのに、かんじんの金の手当てが覚束ないからです。「巻紙もやせる苦界の紋日前」ってんで、昔からの馴染や贔屓筋には必死で訴えますが、若い時のような人気も落ち目で、思うように金の工面ができません。あまりの情けなさにいっそ死んじまおうかとも考えます。でもこのまま死んだところで、移り替えに困ったからと思われると口惜しいし、そうだ心中ということにすれば艶っぽいし、だれも金に困ったからとは思うまい。心中相手は誰がいいかしら、所帯持ちは残された家族が気の毒だし、親掛かりの人は親が悲しむだろうし･･･あの貸本屋の金蔵にしよう。独身ですこしボーっとしているから、あんまり悲しむ人も居ないだろう、ってんで勝手に決められた金蔵こそいい迷惑ですが、彼は惚れた弱みもあり心中の相方を承知します。お染はとうに肚をすえてますが、まだふん切りのつかない金蔵との入水までのやりとりは、さすが一級の笑いにあふれています。金蔵が海に突き落とされたところで心中は中止。遠浅で水がひざまでしかなくて金蔵も死なず、いきさつを聞いて女の仕打ちに怒った金蔵の親分が、お染に仕返しをすることになります。話の中で博打の手入れと勘違いした子分の一人が、博奕場でぬかみそのたるを踏み抜いてしまい、男の大事な急所を落としちまったと、古漬けなすを握りしめて大騒ぎをするくだりは大笑いさせられます。

▲昭和４年現存した島崎楼（品川遊郭史考より）

品川宿の食売旅籠屋

品川宿の遊廓は吉原に匹敵するほどのにぎわいで、北州吉原に対して南国と称していました。吉原は官許の遊廓ですが、品川では慶長６(1601)年に早くも宿屋に飯盛女を置くことが許されています。ここでは源氏名など吉原のしきたりや格式ばったこともなく、より庶民的で気楽に遊べる場所として人気がありました。「こんなこたァ学校じゃおせえない」てェのが志ん生の口癖でした。

吉原筋からの苦情や圧力もたびたびで、関東取締出役が天保14(1843)年正月に品川宿の調査をしたところ、旅籠屋は94軒、食売女は1348人と、認可定員500人をはるかに超えており処罰を受けたとのことです。因みに家数は1,564軒、人口6,890人（男3,272人、女3,618人）と女性が多いのが分かります。時代はさかのぼりますが、享保時代に江戸町人の男女比は６：４です。しかしこれに武士や僧侶・神官などを加えると、実際の男女比は８：２近くになるのでしょうか？川柳「品川の客にんべんのあるとなし」がその実態を示しています。まあ廓の歴史はどうでもいいんですが。

土蔵相模と島崎楼

品川で代表的な妓楼といえば歩行新宿の「相模屋（土蔵相模）」が有名で、桜田門外で井伊大老を襲撃した水戸浪士達が決行前日に酒宴をしたり、高杉晋作や井上聞多、久坂玄瑞ら長州藩士が逗留して、御殿山の英国公館焼打ちに加わったりと、数々の歴史エピソードの舞台にもなっています。その跡はおもかげのかけらもありませんが、昭和６(1931)年の写真にかつての面影がかろうじて感じられます。

▲昭和初期以前の土蔵相模（品川遊郭史考より）

ところで落語「品川心中」で白木屋のモデルとなったのは「島崎楼」のようです。「敷地から言えば土蔵相模よりも、八つ山寄りの島崎楼のほうが広かったし見世の格も上だった。裏には船に乗って遊びに来るお客専用の桟橋があった」(秋谷勝三著『品川宿遊里三代』）とあり、お染と金蔵の二人が見世裏の桟橋から海に飛び込む、という噺のすじがきにピッタリです。その痕跡はもちろん雰囲気も皆無ですが、昭和４(1929)年に発行された永田宗二郎著『品川遊廓史考』に唯一写真のみが載っていました。この本は非売品で品川三業組合刊行となっており、とてもめずらしいものと思われます。これらの情報は品川宿の精巧な復元模型がある「品川歴史館」ですべて取材しました。親切な学芸員の方から貴重な資料などを教えて頂き、実地の街歩きをほとんどせずともここで知識が得られました。数年前に友の会見学会「江戸四宿を歩く 品川宿」があり、それを思い出して品川宿散歩気分を反芻しました。

▲「品川宿傍示杭」

【取材】文・写真：広報部会・稲垣武志
イラスト：同・松原良

催事案内

古文書講座

各編とも９月から第２期を開講

すでに申込は締切りましたが、９月から第２期を下記日程で開講します。今回から初級編も２講座制です。

◆入門編

- 講師：小松賢司さん(学習院大学大学院史学専攻)
- 開催日：9月2日(水)、10月7日(水)、11月4日(水)
- 時間：A講座は10：30～12：30
  P講座は14：00～16：00

◆初級編

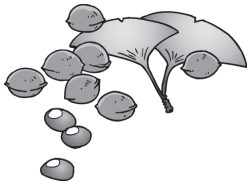
- 講師：田中潤さん(学習院大学大学院史学専攻)
- 開催日:9月16日(水)、10月21日(水)、11月18日(水)
- 時間：A講座は10：30～12：30
  P講座は14：00～16：00

◆中級編

- 講師：長坂良宏さん(学習院大学大学院史学専攻)
- 開催日:9月19日(土)、10月17日(土)、11月21日(土)
- 時間：14：00～16：00

- 会場：各講座とも江戸博1階会議室または学習室1、2
- 参加費：各講座とも全3回1,500円(初回一括払い)

【企画担当責任者】上田太一(事業部会)



友の会特別観覧会

●特別展「よみがえる浮世絵 ―うるわしき大正新版画展」

◆「新版画」とは、江戸時代の浮世絵版画と同様の技法で制作された、大正から昭和初期に興隆した木版画のことをいいます。当時、社会の近代化にともない風前の灯だった伝統的な木版技術を復興し、新たな芸術を生み出そうと、版元の主導のもと、絵師(版画家)、彫師、摺師が結集し、風景画、美人画、役者絵など2000点を超える新版画が作られました。今回の特別展は、江戸からの伝統を引き継ぎつつ、新たに創造された新版画とその関連資料が展示され、近代の東京文化をとらえなおすよい機会です。担当の小山周子学芸員による「見どころ解説」をお願いしていますので、ご期待ください。

- 開催日：9月25日(金)17：00～19：00
- 申込締切：9月15日(火)必着
- 会場：江戸東京博物館・1階映像ホール／企画展示室
- 定員：130名　同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員500円・同伴者700円(当日払い)

【企画担当責任者】松原良(事業部会)

友の会セミナー

第85回「中世から江戸初期にかけての隅田川」

講師　鈴木俊弘さん

(成城大学民俗学研究所研究員)

◆隅田川は東京を流れる最も大きな河川の一つです。その隅田川について中世から江戸初期にわたっての歴史を、隅田川河畔にある木母寺(もくぼじ)に伝わる梅若丸伝説や武士団伝説をまじえ話していただきます。

○講師略歴：すずき・としひろ
法政大学文学部講師を経て成城大学民俗学研究所研究員を務める。著書に『中世成立期の荘園と都市』、『明治期日本の光と影』など多数。

- 開催日：9月26日(土)14：00～15：30
- 申込締切：9月15日(火)必着
- 会場：江戸東京博物館・1階ホール
- 定員：200名　同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)

【企画担当責任者】藤村武雄(事業部会)

第86回「江戸博物と好奇心」

講師　鈴木一義さん

(国立科学博物館　科学技術史グループ　グループ長)

◆江戸時代は、特に、吉宗以降、実証的な博物学が盛んとなり、動植物や鉱物などの本草やそれにまつわる研究や関心の高まりは、わが国の各地におよぶこととなりました。進んだ西洋文明への憧憬から蘭癖大名とされる松浦静山や、大坂の町人文化を代表する木村兼葭堂、著名な平賀源内等々、多くの優れた人物が輩出し、彼らの情報と知識は、好奇心あふれる民間にも広まり、実際に人々の役に立つ実学や技術の道を開きました。伊能忠敬の全国測量や、国友一貫斎・田中久重・華岡青洲等の手になる成果や偉業は、江戸時代後期の日本の実学的成果が西洋に勝るとも劣らない状況だったことを示していることなどを話していただきます。

○講師略歴：すずき・かずよし
日本の科学技術史が専門。対象分野は、江戸時代のからくり人形、鉱山・測量技術から、明治の造船、紡績、現代の自動車、飛行機、ロケットまで、広範囲にわたる。著書に『見て楽しむ江戸のテクノロジー』(監修　数研出版)『日本人の暮らし』(監修　講談社)『日本の鉱山文化』(国立科学博物館　図録)など。

- 開催日：10月31日(土)14：00～15：30
- 申込締切：10月22日(木)必着
- 会場：江戸東京博物館・1階映像ホール
- 定員：100名　同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)

【企画担当責任者】竹橋直久(事業部会)

見学会

「広重『江戸百景』周辺探訪―その1（日本橋北周辺）

◆広重『江戸百景』は安政期の江戸の四季、風景、風俗などをこまやかに描いた作品です。この企画は、広重が描いたと思われる場所とその周辺を探訪し、今の街の姿のなかに江戸時代の風景、背景を思い浮かべ、そこに吹く風や情景を少しでも感じていただこうとするものです。

今回は江戸随一の商業の町であった日本橋北周辺（日本橋南詰から人形町まで）を歩きます。そこには商人たちや職人たちの活気ある動きと元気な声がありました。所要時間は約３時間、日本橋人形町で解散となります。

【今回訪ねる広重の作品】『日本橋江戸ばし』、『日本橋雪晴』、『する賀てふ』、『神田紺屋町』、『大てんま町木綿店』、『大伝馬町呉服店』

- 開催日：10 月 24 日（土）12 時 45 分集合
  集まり次第、時間前でも順次出発します。
- 集合場所：日本橋南詰交番前広場
- 申込締切：10 月 13 日（火）必着
- 定員：100 名　同伴者可（はがきに氏名、住所、電話番号連記）
- 参加費：会員、同伴者とも 500 円（当日払い）

【企画担当責任者】山本隆（事業部会）

お申込方法

お申込方法

◆**普通はがき**に、①催事名（略名可）・開催日、②会員番号、③氏名（同伴者連記）を明記して下記の「友の会事務局」へ。
「往復はがき」の必要はありません。
なお、見学会に限り傷害保険の関係で同伴者の氏名、住所、電話番号も書いてください。

◆締切：各催事の案内をご覧ください。

◆申込は、各催事ごとに会員１人１通。

◆友の会へのご意見・ご要望があればご記入ください。

◆申込先：〒 130-0015　東京都墨田区横網 1-4-1
江戸東京博物館友の会事務局

＊「えどはくカルチャー」など江戸博への申込と違い、普通はがきで宛先も友の会事務局と明記ください。お間違いなく！

＊お申込いただきますと、「受講票」をお送りします。当日ご持参のうえ、受付でご登録ください。
なお「受講票」は逐次お送りするのではなく、申込締切数日後一斉にお送りしますので、それまでお待ちください。

＊いずれも**申込多数の場合は抽選となることがあります**。

＊「受講票」未着のお問合せや参加予定変更の連絡などはなるべく事務局員出勤の**水曜日か金曜日（10 時～ 12 時、13 時～ 17 時）**にお願いいたします。

＊「受講票」がないと受講できません。必ず事前に申込をしてからご参加ください。

会員優待のお知らせ

●残り会期わずか、お見逃しなく！

「写楽　幻の肉筆画　ギリシャに眠る日本美術　～マノスコレクションより」

会　期　2009 年 7 月 4 日（土）～ 9 月 6 日（日）
休館日：毎週月曜日
会　員：一般650円、65歳以上320円、大・専門生520円
同伴者：一般1,040円、65歳以上520円、大・専門生830円
＊小学生・中学生・高校生は 65 歳以上と同じ

次回予告

●特別展

「よみがえる浮世絵　～うるわしき大正新版画」

会　期　2009 年 9 月 19 日（土）～ 11 月 8 日（日）
休館日：毎週月曜日、ただし 9 月 21 日（月・祝）、10 月 12 日（月・祝）は開館、10 月 13 日（火）は休館
会　員：一般650円、65歳以上320円、大・専門生520円
同伴者：一般1,040円、65歳以上520円、大・専門生830円
＊小学生・中学生・高校生は 65 歳以上と同じ

企画展のご案内

●企画展

好評開催中！

「江戸東京ねこづくし展」

会　期　2009 年 8 月 13 日（木）～ 9 月 27 日（日）
会　場　常設展示室 5 階　第 2 企画展示室

●次回企画展

「えどはくでおさらい！　江戸時代　～教科書でみたあの人、この絵～」（仮称）

会　期　2009 年 10 月 6 日（火）～ 11 月 29 日（日）
会　場　常設展示室 5 階　第 2 企画展示室

会報＜えど友＞第 51 号
平成 21 年 9 月 1 日発行（奇数月 1 日発行）
編集・制作：江戸東京博物館友の会広報部会

編集長兼発行人：松原良（会長）　副編集長：菅沼和男
編集人：佐藤幸彦、稲垣武志、岡田守弘、岡本静雄、深尾恵美子、福島信一、小松美幸、松田悠美子、中里弘子、島尻茂樹
発行：江戸東京博物館友の会
〒 130-0015　東京都墨田区横網 1-4-1　電話 03-3626-9910